

令和 6 年 6 月 17 日現在

機関番号：82602

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19539

研究課題名（和文）看護系大学での経験、学修および生活が就職後の組織適応に及ぼす影響

研究課題名（英文）Impact of Nursing School Experiences, Learning, and Life on Post-Employment Organizational Adjustment

研究代表者

保田 江美（Yasuda, Emi）

国立保健医療科学院・その他部局等・主任研究官

研究者番号：20803258

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,200,000円

研究成果の概要（和文）：看護師等学校養成所を卒業し、看護師として病院に就業している若手看護師の学生時代の経験や学修、生活が就職後の組織適応に及ぼす影響を質問紙調査によって明らかにした。看護師としての経験年数2～5年目の看護師148名より回答を得た。その結果、学校養成所1-2年次の演習における経験学習、領域別実習における自己効力感、大学生活満足度が就職後の組織適応に影響を及ぼしていることが明らかになった。とくに、学校養成所1-2年次の演習における経験学習が就職後の組織適応に及ぼす影響が大きく、影響しており、低学年時の看護技術演習において経験を学びにする力を醸成することの重要性が示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界的にみても急速に進行する少子高齢化等、看護を取り巻く環境は激しい変化に見舞われている。看護師に対する要求は質・量ともに高まるばかりであり、看護師の育成には、学校養成所でいかに専門職業人としての基盤を構築するかが重要である。本研究からは、就職後の組織適応において、大学1-2年次の看護技術演習における経験学習の力を醸成すること、領域実習において学生の実習自己効力感を高めることの重要性が明らかになり、大学教育において、教員の具体的かつ有効な支援を提案することができた。

研究成果の概要（英文）：This study elucidated the impact of experiences, learning, and life during student days on the organizational adaptation of young nurses who graduated from nursing schools and are employed in hospitals. A questionnaire survey was conducted, gathering responses from 148 nurses with 2 to 5 years of experience. The results revealed that experiential learning during practical exercises in the first and second years of nursing school, self-efficacy during specialized practical training, and satisfaction with university life significantly influenced post-employment organizational adaptation. Notably, experiential learning during practical exercises in the first and second years had a substantial impact on organizational adaptation after employment, emphasizing the importance of fostering the ability to turn experiences into learning during nursing skills practice in the early years.

研究分野：看護教育学

キーワード：看護学生から看護師へのトランジション 経験学習 実習自己効力感 組織社会化

1. 研究開始当初の背景

世界的にみても急速に進行する少子高齢化等、看護を取り巻く環境は激しい変化に見舞われている。看護師に対する要求は質・量ともに高まるばかりであり、看護師の育成には、看護系大学で体系的に学び、専門職業人としての基盤を構築することが重要となる。

看護系大学で学ぶ学生が学士課程を修了し就業する、つまり、看護学生から看護師へ移行する過程において、彼らは役割の変化を経験し(Higgins, et al., 2010)、この変化に大きなストレスを感じるといわれている(Fox, et al., 2005; Winter-Collins & McDaniel, 2000)。新人看護師にとってストレスフルなこの移行が円滑におこなわれなかった場合、退職もしくは最悪のケースでは、看護職からの離職につながることもある(Hoffart, et al., 2011; Park & Jones, 2010)。よって、看護学生から看護師への移行を円滑に進めていく支援が看護系大学と看護学生が就職する病院施設双方に求められている。

しかし、これまで、看護学生から看護師への移行に関連する研究はその多くが、新人看護師に公式、非公式にどのような支援を提供すれば、組織に定着し、成長していくのかという病院施設の視点でなされてきた。上述のとおり、専門職業人の育成は、看護系大学での経験や学修、生活に基盤を置くものであり、看護学生から看護師への移行を円滑に進めていくためには、看護系大学で培われた基盤が、看護師への移行のなかでどのような意味をもつのかを検討し、大学教育において実施可能な支援を考える必要があるだろう。

医療系以外の一般大学における学生から職業人への移行においては、大学から仕事へのトランジション研究として多くの研究蓄積がある。トランジションとは、「フルタイムの学校教育 (full-time schooling) を修了して、安定的なフルタイムの職 (stable full-time work) につくこと(溝上・松下, 2014)」をいう。申請者はこれまでに、キャリア意識を大学1・2年の頃より高く持つことが組織への適応を示す組織社会化に直接的に影響を及ぼすことを明らかにした(保田・溝上, 2014)。また、同研究では、キャリア意識を大学1・2年の頃より高く持つことは、大学時代の自主学習や主体的な学修態度を促し、間接的に組織社会化やその後の仕事での活躍に影響を及ぼすというトランジションのプロセスを明らかにしている。

さらに、申請者は、大学時代に授業外コミュニティを持っている学生、大学生活が充実している学生ほど、プロアクティブ行動(就職後の組織社会化に必要な知識や技術を主体的に獲得しようとする行動)をとっていることを明らかにした(館野・保田ら, 2016a)。

しかし、これら、医療系以外の一般大学におけるトランジション研究の成果を看護系大学で学ぶ学生にそのまま適用することは難しい。その理由は、看護系大学で学ぶ学生は、一般大学で学ぶ学生に比べ、1)看護職に就くことを志して入学しており、仕事への興味、関心が強いと考えられること、2)看護系大学に特有の技術演習や臨地実習を長期に経験するため、仕事に直接的につながる経験が多いこと、3)臨地実習においてリアルな仕事の現場を経験すること、があげられる。よって、看護系大学で学ぶ学生を対象とした大学から仕事へのトランジション研究が求められると考える。

2. 研究の目的

研究開始当初の目的は、看護系大学で学ぶ学生の学生時代の経験や学修、生活が就職後の組織への適応に及ぼす影響を検討することであった。しかし、研究実施期間に新型コロナウイルス感染症の流行があり、研究対象施設および研究対象者の協力を得ることが難しかった。よって、対象を広げ、看護系大学を含む看護師等学校養成所で学ぶ学生の学生時代の経験や学修、生活が就職後の組織への適応に及ぼす影響を検討することを目的とした。

3. 研究の方法

研究課題開始時には想定していなかった新型コロナウイルス感染症の流行により、新人から若手看護師を取り巻く職場上の環境が変化した。よって、当初予定していた質問紙調査の前段階として、コロナ禍の看護学生から看護師へのトランジションにおける新人看護師の感情および思考を明らかにするインタビュー調査を実施した(新人看護師16名)。これにより、質問紙調査において、コロナ禍の影響を検討する必要があるか、を確認した。

その結果より、就職後の経験の質に多少の変化はあるものの、質問紙調査において新型コロナウイルス感染症の流行に合わせた項目を調査する必要性はないと判断した。よって、先行研究をもとに、看護系大学を含む看護師等学校養成所で学ぶ学生の学生時代の経験や学修、生活に関する変数を特定し、以下の作業仮説を設定した。

大学1-2年次の学習に対する積極的関与は、領域別実習における臨床実習自己効力感を高め、4年次の大学生生活満足度を高め、職業的社会化に正の影響を示す。

大学1-2年次の学習に対する積極的関与は、領域別実習における臨床実習自己効力感を高め、4年次の大学生生活満足度を高め、文化的社会化に正の影響を示す。

大学1-2年次の看護技術演習における経験学習は、領域別実習における臨床実習自己効力感を高め、4年次の大学生生活満足度を高め、職業的社会化に正の影響を示す。

大学1 - 2年次の看護技術演習における経験学習は、領域別実習における臨床実習自己効力感を高め、4年次の大学生生活満足度を高め、文化的社会化に正の影響を示す。

大学1 - 2年次の学習に対する積極的関与、看護技術演習における経験学習、領域別実習における臨床実習自己効力感、4年次の大学生生活満足度はそれぞれ、職業的社会化に直接的な正の影響を及ぼす。

大学1 - 2年次の学習に対する積極的関与、看護技術演習における経験学習、領域別実習における臨床実習自己効力感、4年次の大学生生活満足度はそれぞれ、文化的社会化に直接的な正の影響を及ぼす。

インターネット調査会社に登録している看護師のうち、1) 3年課程看護専門学校、もしくは3年課程看護短期大学、もしくは4年課程看護大学を卒業し、2) 看護師として働き始めて2 ~ 5年目の看護師で、3) 現在、病院(20床以上)に勤務している者を対象に、Web上で質問紙調査を実施した。

倫理的配慮として、研究代表者が所属する機関の倫理審査を受審し、承認を受け実施した。質問紙調査では、個人が特定される情報はインターネット調査会社から受け取らず、暗号化してデータを受領した。また、Web上の質問紙調査開始時に、研究の趣旨、研究方法、プライバシーおよび個人情報の保護、研究結果の公表方法、研究中・後のデータの管理等について画面に掲載し、チェックすることで具体的な質問画面に遷移するようにした。

4. 研究成果

2020年以降、新型コロナウイルス感染症の流行により、学会参加による情報収集や調査協力施設、調査協力者を得ることが困難となり、計画の微修正を余儀なくされたが、予備調査を実施することで、新型コロナウイルス感染症の流行が本研究に及ぼす影響を確認したうえで、本調査を実施することができた。成果としては予備調査の学会発表1件となるが、今後、本調査の結果を論文誌としてまとめ、投稿する。以下、予備調査と本調査の結果の概要を報告する。

< 予備調査(新人看護師へのインタビュー調査) >

本調査の目的は、A看護系大学を卒業し、看護師として病院に就職した卒後1年目の看護師が、自身の臨床での経験から、どのような感情を抱き、思考を巡らせているのかを明らかにすることであった。その結果を踏まえ、新型コロナウイルス感染症の流行を加味した質問紙調査の設計が必要かを判断した。A看護系大学を卒業し看護師として病院の病棟に勤務する卒後1年目の看護師16名に対し、インタビューガイドを用いた半構造化インタビューを実施した。分析の結果、臨床経験から生じる感情および思考として、《臨床経験をもとにおこなう看護教育の評価》、《臨床現場での当惑》等6つのカテゴリーと15のサブカテゴリーが抽出された。この結果を考察し、既存研究で明らかになっていた感情や思考と大きく変化がないことを確認した。

< 本調査 >

パス解析を実施し、仮説 および は支持、 および は一部支持、 および は棄却された。職業的社会化および文化的社会化にもっとも大きな影響を及ぼした変数は、「大学1 - 2年次の看護技術演習における経験学習」であった。経験学習はその後の変数を媒介した間接効果よりも直接効果のほうが高かった。「大学1 - 2年次の学習に対する積極的関与」はその後の変数にまったく影響を及ぼしていなかった。このことから、学習への積極性よりも、基礎的な看護技術の演習においていかに経験を学習にするか、が重要であることがわかった。経験学習を促進する教員の演習内容の工夫、指導方法の工夫が必要であることが示唆された。

また、「領域別実習における臨床実習自己効力感」も就職後の職業的社会化および文化的社会化に直接的に正の影響を及ぼしていた。領域別実習において自己効力感を高めるような実習環境の整備、教員の指導方法の工夫の重要性が示唆された。

【引用文献】

- Fox, R., Henderson, A., & Malko-Nyhan, K. (2005). They survive despite the organizational culture, not because of it: A longitudinal study of new staff perceptions of what constitutes support during the transition to an acute tertiary facility. *International Journal of Nursing Practice*, 11(5), 193–199. <https://doi.org/10.1111/j.1440-172x.2005.00530.x>
- Higgins, G., Spencer, R. L., & Kane, R. (2010). A systematic review of the experiences and perceptions of the newly qualified nurse in the United Kingdom. *Nurse Education Today*, 30(6), 499–508. <https://doi.org/10.1016/j.nedt.2009.10.017>
- Hoffart, N., Waddell, A., & Young, M. B. (2011). A Model of New Nurse Transition. *Journal of Professional Nursing*, 27(6), 334–343. <https://doi.org/10.1016/j.profnurs.2011.04.011>
- 溝上慎一, 松下佳代. (2014). 高校・大学から仕事へのトランジション: 変容する能力・アイデンティティと教育. ナカニシヤ出版. ISBN: 9784779508318.
- Park, M., & Jones, C. B. (2010). A Retention Strategy for Newly Graduated Nurses. *Journal for Nurses in Staff Development (JNSD)*, 26(4), 142–149.

<https://doi.org/10.1097/NND.0b013e31819aa130>

舘野泰一, 中原淳, 木村充, 保田江美, 吉村春美, 田中聡, 浜屋祐子, 高崎美佐, 溝上慎一.
(2016). 大学での学び・生活が就職後のプロアクティブ行動に与える影響. 日本教育工学会
論文誌, 40(1), 1-11. <https://doi.org/10.15077/jjet.39090>

保田江美, 溝上慎一. (2014). 初期キャリア以降の探求－「大学時代のキャリア見通し」と「企業
におけるキャリアとパフォーマンス」を中心に. 中原淳, 溝上慎一 (編), 活躍する組織人の
探求－大学から企業へのトランジション, pp. 139 - 173. 東京大学出版会. ISBN:
9784130402637.

Winter-Collins, A., & McDaniel, A. M. (2000). Sense of belonging and new graduate job
satisfaction. *Journal for nurses in staff development (JNSD)*, 16(3), 103–111.
<https://doi.org/10.1097/00124645-200005000-00002>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 保田江美・新藤由記子・川村崇郎・島田伊津子
2. 発表標題 卒後1年目の看護師の臨床経験から生じる感情および思考 円滑な移行に向けた看護教育の成果と課題
3. 学会等名 第15回日本医療教授システム学会総会学術集会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------